

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 前田 和泉 印

学位申請者 プロホロワ マリア

論文名 「境界という自由、境界という苦痛—多和田葉子とリノール・ゴラーリク作品における異種間コミュニケーションをめぐる—」

【博士論文の概要】

提出された論文の構成は以下のとおりである。

序論

第1章 多和田とゴラーリク作品における境界の描き方

第1節 多和田作品における「境界」——創造の交差点

第2節 ゴラーリク作品における「境界」——自由に描く不自由な人々

第2章 21世紀の文学における動物表象の変遷—多様な他者との対話方法の模索—

第1節 動物との対話がグローバルな課題へ

第2節 21世紀の世界文学と「語る動物」の新たなブーム

第3章 多和田作品における異種間コミュニケーションの描き方

第1節 多和田のコミュニケーション論について

第2節 動物が対話参加者に——不理解の力、見直される限界

3.2.1 動物の他者性をめぐって

3.2.2 動物寓話の新たな解釈——「指示物」で終わらない動物

3.2.3 生き延びた動物と絶滅した人間が会うとき——階層の根本を問う

3.2.4 異種間コミュニケーションへの挑戦——不可能な交流はない

3.2.5 まとめ

第4章 ゴラーリク作品における異種間コミュニケーションの描き方

第1節 自己中心性をめぐる問題意識——「便利」な他者を求める人間

第2節 異類の他者とのコミュニケーションから見る共感の可能性

4.2.1 ゴラーリク作品における共感の基本的な性質

4.2.2 極限状況と共感の限界① 戦時における共感の試練

4.2.3 極限状況と共感の限界② 異質な他者との対話を余儀なくされた人々

第3節 子供に託される対話の希望

結論

本論文は、異なる国や言語の境界を越えながら創作する「越境作家」である多和田葉子（1960-）とリノール・ゴラーリク（1975-）の作品における異種間コミュニケーションの表現を比較し、彼らの境界観と動物表象の特徴を明らかにすることを主眼としている。

序論では、現代世界において「境界」の重要性が高まっていく流れが概観される。プロホロワ氏によると、20世紀後半のグローバル化に伴い、ボーダースタディーズ（境界研究）における学術的な関心は、当初の地理的・政治的「国境」から、次第に多義的・主観的な空間としての「境界」へと移っていった。二項対立が崩れ、関係性が多様化する現代世界において、境界研究によって生まれた手法と理論はジェンダー研究や環境批評、アニマル・スタディーズなどにも利用され、様々な分野で「境界」は重要な論点となっている。文学においても、とりわけ国境や言語を越える「越境作家」の境界的表現は新たな展望を提供する可能性を孕むものとして注目されている。本論は多和田とゴラーリクの、とりわけ人間と動物による異種間コミュニケーションが描かれる作品に着目して「境界」の観点から比較分析することにより、両作家の境界観の特徴を浮き彫りにし、現代世界における「境界」の理解を深めることを目指している。

第1章第1節では、多和田の境界表象の特徴について論じられている。多和田作品においては、異なる言語、現実と非現実、男女、生と死などの「境界」は創造的な中間地帯として描かれる傾向がある。また、その際とりわけ言語が重要な役割を果たしていることも指摘される。

第2節では、ゴラーリクの越境観が分析される。ロシア出身のユダヤ系プロテスタントで、現在はイスラエルに在住して主にロシア語で執筆活動が続けるゴラーリクにとって、政治や宗教などの「境界」は戦争や暴力とも隣り合わせのものであった。彼女にとって「境界」は「苦しみながら向き合わざるを得ないもの」であり、「越境」には苦痛が伴う。同時に、ゴラーリクはトランスグレッション（境界侵犯）を重要な美学的挑戦・挑発と捉えている。プロホロワ氏によると、ゴラーリクは「境界」によって試練を受ける「不自由」な人々の内面を重視しつつ、何らかの制限やタブーを象徴する「境界」を突破するあり方に強い関心を寄せている。

多和田とゴラーリクのそれぞれの作品における異種間コミュニケーションの分析に先立って、第2章では、21世紀の思想や文学における動物観および動物表象の変化が概観される。人間と動物のコミュニケーションに関しては、かつては人間中心の立場から動物に言語を教えることに焦点が当てられてきたが、21世紀初頭以降は動物の主体性を尊重した形でのコミュニケーションに関心が移っている。同時に、動物を人間の「鏡」として機能させる従来の寓話型タイプも受け継がれ、二面的な動物表象が見られるとプロホロワ氏は指摘する。人間にとって動物とのコミュニケーションは、「他者性」を問うテーマへと接続するものでもあり、特に2010年代以降の世界文学には「語る動物」が描かれる作品が数多く登場する。本章では L.J.マッケイ『その国の動物たち』、A.アレク

シス『十五匹の犬』、J.マーフィー『言葉話す動物』、町田康『諧和会議』を例に挙げて、これらの作品では動物の主体性と他者性への配慮が多様な形で示されていると分析している。

第3章では、多和田作品における人間同士のコミュニケーションの特徴を整理した上で、人間と動物、もしくは動物同士の異種間コミュニケーションについて考察される。プロホロワ氏によると、多和田は基本的に動物を理解不能な相手ととらえており、それを前提としてコミュニケーションの可能性を模索している。多和田にとって「不理解」は必ずしもネガティブなものではなく、自己と他者をめぐる新たな発見を導く創造的なものとしても機能しうる。想像上の動物に人間の言葉を付して、コミュニケーションにおける言語の役割を再定義しようとする例もある一方で、非言語コミュニケーションや、言語を超えた「純粹言語」の可能性も模索されている。また、21世紀の文学における「二面的な動物表象」に際しては比喩的・寓話的側面に焦点があてられることが多いが、多和田の場合はその二面性を意図的に活用している。その結果として、人間の他者観全体が問われ、人間中心主義的なステレオタイプや階層意識が解体される効果をもたらされる。第1章で述べたように、多和田にとって「境界」は「創造的な中間地帯」とされるが、動物という「異種」を登場させることによって、多和田はコミュニケーションの限界領域を拡大させるのである。

第4章では、ゴラーリクの描く異種間コミュニケーションの様相が検証されている。ゴラーリクの作品においては、まず人間の自己中心的なコミュニケーションのあり方が俎上に挙げられる。他者の「主体性」は人間に苦痛をもたらし、その身勝手な振る舞いを触発する。様々な「無言の他者」（玩具、動物、架空の異類キャラクター）を導入することで、ゴラーリクは人間が他者性を受け入れる準備ができていないことに焦点を当て、問題提起している。彼女は明らかに「無言の他者」の立場に同情を寄せており、対話それ自体よりもむしろ他者への倫理性を重視する。倫理性を担保するための他者への共感、ゴラーリクが作中でしばしば描く「極限状況」（戦争、地獄、天災など）において試練にさらされる一方で、そうした状況下では他者の苦痛が顕在化し、それが他者の主体化にもつながってゆく。また、ゴラーリク作品においては、「対話」や「理解」よりも「我慢」「容認」が他者との共存のために重要視される。大災害後にすべての動物が語り出したという設定の長編小説『呼吸できるすべてのものたち』（2018）でも擬人化された動物は人間にとって「不都合な他者」として描かれるが、それと同時に、言葉を使わないコミュニケーションの可能性や、人間の言葉とは異なる「言葉」の存在など、動物の主体性に一定の配慮が見られる点は、ロシア語文学において稀有な例と言える。また、『ヴェニサーナの冷たい水』（2018）などの児童向けファンタジーでは、他の作品よりも対等で双方向的な異種間コミュニケーションが成立しており、ゴラーリクが「異質な他者」との共存可能性の希望を子どもたちに託している様子が窺える。

結論では、両作家の境界認識や動物表象の相違点と共通点が考察される。「境界」を空間（中間地帯）ととらえる多和田に対して、ゴラーリクにとって「境界」はあくまで「線」ないしは「壁」であり、自分の意思では越えられない「限界」を人間に突きつける。それと同時に、非倫理的行動の「制限」を定めるものとなることもあり、それに関しては肯定的にとらえられている。多和田に

とってもゴラーリクにとっても、「境界」は多義的な場として描かれるが、多和田にとっては境界の空間は創造的かつ「居心地のよいもの」であるのに対し、ゴラーリクにとって「境界」は普遍的な苦痛や試練をもたらす。どちらの作家も「境界」と向き合うのに際して「共感」を重視するが、多和田の場合は意識的な努力を前提とした「認知的共感」であり、一方のゴラーリクは「無差別的な情動的共感」である。動物表象に関しては、多和田は動物の主体性を重視し、人間-動物の階層性を解体する傾向が強い。ゴラーリクの場合は人間中心のだが、動物を人間の自己中心的なコミュニケーションに従属しない「不都合な他者」として描くことによって、動物の主体性を侵犯しない配慮が見られる。両者の相違点は、双方のプロフィールや文化的背景の違いに由来するところが大いと思われるが、その一方で、どちらの作家においても「動物」という異類の他者に対して、それぞれの手法によってその主体性を尊重する方向性が示されており、それは現代世界における動物表象の大きな流れとも合致するものと言える。

以上のように、本論においてプロホロワ氏は、多和田葉子とリノール・ゴラーリクという異なる文化背景を持つ「越境作家」の境界表象と異類観コミュニケーション描写を詳細に分析・比較することによって、文学におけるボーダースタディーズに新たな視座をもたらしている。まず特筆すべきは、プロホロワ氏がその卓越した日本語力と文学作品を読み解く感性を生かし、日・露・英の膨大な資料や先行研究を踏まえつつ、両作家の日本語とロシア語の作品テキストを緻密に分析している点である。特に、ほとんど先行研究がない現代作家であり、なおかつ多彩な活動を繰り広げているゴラーリクに徒手空拳で取り組み、その作品世界の特徴を言語化した意義は大きい。直接的には接点のない二人の作家を、「異類間コミュニケーション」という角度からアプローチすることで比較の遡上に載せ、「現代の世界文学の大きな流れの中に、その支流というべきものがいくつも存在し、様々な角度で交差し続けている」(p. 62) 様相を浮き彫りにした本論は、比較文学研究として優れた論考であると言えよう。

【審査の概要】

本論文の最終試験は2023年6月11日15時より対面およびオンラインによるハイフレックス形式で実施された。審査委員会は、前田和泉(主査)、武田千香、山口裕之、沼野恭子(外部委員:本学名誉教授)、高柳聡子(外部委員:本学非常勤講師)の5名で、在外研修中の山口教授はオンラインにて参加した。審査ではプロホロワ氏が本論文の概要をプレゼンテーションした後、各審査委員との間で質疑応答が交わされた。所要時間は約2時間35分であった。

論文全体の講評としては、まず「境界」「異類間コミュニケーション」というテーマ設定の独自性と意義が高く評価された。特にロシアにおいては動物表象研究が未発達で、そのような観点からロシア語文学を研究すること自体がチャレンジングな試みであり、また比較文学の観点からも独創的な研究と言えるが、深く丁寧な読みに裏打ちされた論旨は説得力があり、日本とロシアの現代文

学の特質の一端を浮かび上がらせることに成功している。論考を叙述する文章も日本語非ネイティブ話者として驚異的なレベルにある。プロホロワ氏自身が複数の言語や文化を「越境」してきた人であるからこそ、こうしたテーマを深く突き詰めて考察することができたと言えよう。

その一方で、本論の有する課題や疑問点についても審査委員から指摘がなされた。主なものは以下のとおりである。

- ・なぜこの二人を比較するのか。この二人を比較することによって最終的に何が得られたのか。
- ・多和田に関して、「中間地帯」という表現は適切なのか。「中間地帯」という独立した場があるのではなく、異質なものが混じり合う場所ではないのか。
- ・この二人を「越境作家」と評することによって、安易なレッテル貼りになる危険性がある。
- ・多和田は言語に対する関心が強い。これと比較するのであれば、ゴラーリクの言語観にもっと着目しても興味深いのではないか。
- ・ゴラーリクに関する記述（第1章第2節、第4章第1節）は、構成がやや入り組んでいるので、もう少し整理した方がよかった。
- ・ロシア出身のユダヤ系でイスラエル在住の作家であるゴラーリクがプロテスタントを信仰しているというのは、それ自体がかなりの「トランスグレーション」である。p.43で彼女のキリスト教的バックグラウンドについて指摘されているが、もっとこの点について踏み込んでもよかったのではないか。
- ・二人の動物表象の違いは、それぞれの文化的背景に由来するところも大きい。文化によって動物観は異なるものであり、その点も踏まえた上で比較すべきではないか。
- ・本論での充実した議論に比べて、結論の記述があっさりしすぎている。

これらの指摘に対して、プロホロワ氏は正面から、極めて誠実に応答した。なぜこの二人を比較するのかという疑問は、この研究テーマを掲げた当初から問われ続けていたことだが、これについてプロホロワ氏が本論の執筆を通じて深く考え抜いてきたことが、その発言から窺えた。プロホロワ氏によると、両作家は異なる文化的背景を持ち、その境界観も対極的であるにも拘わらず、両者の描く「境界」の根本的な性質には共通点が多い。接点のない二人の作家について「仮想的な対面」をさせることによって、今後の「境界」研究の糧となるような新たな視座が得られたとプロホロワ氏は説明した。

文化による動物観の差異については、両作家の文化的背景が複雑であり、単純に日本とロシアだけではなく、多和田の場合はドイツ、ゴラーリクの場合はイスラエルに加えてアメリカなどの英語圏からの影響もあるため、本論ではあえて触れなかったと説明された。また、ゴラーリクの宗教的背景については、彼女の境界観と宗教とはもちろん密接な関係があるものの、短絡的な因果関係でまとめることを避ける意図があったという。

一方、一部の用語の用法については、その表現をより彫琢すべきであったことを率直に認め、また構成の甘さも改善点として認識していることがわかった。ゴラーリクの言語観については、本論では扱う余地がなかったものの、それ自体は興味深いテーマであり、今後の研究の課題として考えている、とのことであった。

全体として、議論はしっかりとかみ合った充実したものとなった。プロホロワ氏はそれぞれの指摘や質問に対して丁寧に説明し、現時点での課題や不足する点についてもしっかりと認識していることが確認できた。審査冒頭に行われた論文概要のプレゼンテーションも極めてわかりやすく整理されており、プロホロワ氏がこのテーマについて深く理解し、明晰に言語化できるレベルに到達していることが窺えた。

以上、本審査委員会は、プロホロワ氏の提出論文および最終審査の評価結果から、同氏が本学大学院博士後期課程の博士号学位の取得に十分な水準を満たしていると判断し、全員一致で同氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるとの結論に至った。